

# 『懷風藻』序と唐人撰詩集

## 一 はじめに

詩集が編纂されることは、その時代の詩学理念を實現させるためである。特に、編纂者によって序文が付される場合には、自らの文学理念が語られることが多い。中国では詩文集に序文を付け加え、その成立事情や編纂動機さらに編纂者の文学観などを書き表すことは、夙に『毛詩』の大序に始まるが、それは詩文集の典型として歴代の撰詩者に尊重され、受け継がれた。日本の場合も、和漢の詩歌・文集、あるいは『古事記』などの史書に序文を付け加えることが見られる。それゆえに、序文について考察することは、何よりもその詩歌・文集を理解するための第一段階の手続きとして重視されてきた。

上代の漢詩集である『懷風藻』の序文についても、従来

黄 少 光

より様々な方法で研究されてきた。漢文であることから、中国の詩序との比較が重んじられてきたが、江村北海が日本漢詩は大陸より二百年も遅れたと論じたことにより、以後の研究においてはその比較対象となる中国文献が自ずから限定されたのである。すなわち、『懷風藻』の序文と中国六朝の梁時代に編纂された詩文総集の『文選』序とを比べ、その語句や序文の構成規範などの相似していることが指摘されるにとどまっている<sup>①</sup>。しかし、加藤有子氏は、両序を再確認したうえで、『懷風藻』序の中で最も『文選』序に類似しない部分である近江朝の描写が、唐の玄宗の「春晩宴両相及礼官麗正殿学士探得風字並序」と類似していることを指摘しながら、「今後『懷風藻』の後半部分における同時代資料の確認、つまり盛唐の前半までの資料の検索の必要性を問う」と述べているのが注目される<sup>②</sup>。

本論はこの加藤説を受けて、『懷風藻』序にあつて『文選』序にはない詩集総序としての特徴を、唐に成立した幾つかの詩文集の序を用いて比較しながら、その時代における詩文総集の序の内容規定と形式規範を検討してみたい。

## 二 『懷風藻』序―現存する唐代スタイル詩序の最古の序文

まず、『懷風藻』序と『文選』序との文末部分を掲げ、その特質について検討を加えたい。

### 『懷風藻』序

：余以薄官余間、遊心文囿。閱古人之遺跡。想風月之旧遊。雖音塵渺焉。而余翰斯在。撫芳題而遙憶。不覺淚之泫然。攀縵藻而遐尋。惜風声之空墜。遂乃取魯壁之余蠹。綜秦灰之逸文。<sup>a</sup>遠自淡海。云暨平都。<sup>b</sup>凡一百二十篇。勒成一卷。作者六十四人。具題姓名。并頭爵里。冠于篇首。<sup>d</sup>余撰此文意者。為將不忘先哲遺風。故以懷風名之云爾。于時天平勝宝三年。歲在辛卯。冬十一月也。

### 『文選』序

余監撫余閑。居多暇日。歴觀文囿。泛覽辭林。未嘗不心遊目想。移晷忘倦。：乃事美一時。語流千載。概見墳籍。旁出子史。若斯之流。又亦繁博。雖伝之簡牘而事異篇章。今之所集亦所不取。至於記事之史。繫年之

書。所以褒貶是非。紀別異同。方之篇翰亦已不同。若其讚論之綜緝。辭采序述之錯比。文華事出於沈思。義歸乎翰藻。故與夫篇什雜而集之。遠自周室。迄于聖代。都為三十卷。名曰文選云爾。凡次文之體。各以彙聚。詩賦體既不一。又以類分。類分之中。各以時代相次。

『懷風藻』の編者は、その序の文末に、自己の社会的地位、編纂当時の心情、収集当時の環境、収集の範囲、総詩数、総作者数、編纂方法、編纂意図と命名の由来、編纂完了の年次などについてを簡潔に叙述する。傍線部の a 収集範囲、b 総詩数、巻数、総作者数、d 命名の由来、e 命名などを明示することは、当時に編纂された詩集の序文の一般的なスタイルと思われる。一方、『文選』序の波線の部分は『懷風藻』序に影響を及ぼしたところであり、これはすでに先行論文によって指摘されている。<sup>6)</sup>傍線と波線の部分は、詩文集の命名についてである。『文選』以来、詩文集序や書序などにおいては、明確に詩文集序または書序を意識し、その命名の由来を述べるものが一般的である。日本の和漢詩歌・書序も同様に、序文スタイルのこの命名手続きに従っている。後に編纂された勅撰三集の序や、空海の『性靈集』序、『菅家後集』に載る書序、更に勅撰和歌集の『古今和歌集』の仮名・真名序なども同様である。但し、『文選』の「文を選び集める」というシンプルな命名

に対して、初・盛唐の詩歌集が命名される際には、詩集名の由来を述べ、また自らの理念や祈願などを嵌め込み、文学的な意義を持たせることが一般的である。例えば初・盛唐に編纂された詩文総集の『正声集』『朝英集』（以上二書は逸書）『珠英集』『河岳英靈集』『国秀集』『丹陽集』などにはこのような傾向が窺える。中でも、盛唐の殷璠撰『河岳英靈集』序には「粵若王緯、王昌齡、儲光羲等二十四人、皆河岳英靈也。此集便以河岳英靈為号」<sup>8</sup>とあり、そこには詩人への評価を以て命名し、「河岳」の英靈が永遠に伝わってほしいという祈願が窺えるのである。『懷風藻』序にも「余が此の文を撰ぶ意は、將に先哲の遺風を忘れずあらむが為なり、故懷風を以ちて名づくる云爾」とあるように、ここにおいて「直接的には、壬申の乱による文物の焼失、また長屋王の変のような政変がたび重なり、文物、ことに個人の詩文などが散逸し消滅することに対する文学上の危機意識が契機となっており、わが国の文運が衰退することなくますます隆盛することを願」い、更に近江宮廷の「置醴之遊」の風雅を懐い、そしてこの「先哲の遺風」を再現し永遠に伝えようという祈りを読み取ることができる<sup>10</sup>。従って、『懷風藻』や平安前期に成立した勅撰三集などの命名も、初唐のこうした永遠への願いによる命名の風潮の下で可能だったと思われる。ちなみに、大江千里撰と伝えら

れる『句題和歌』の冒頭に載る、「序」と称される漢文は、この命名の手續きを踏んでいないために、序文を意識して書いたものではなく、宇多天皇に奉る奏状文や上表文の性格がむしろ強いと考えられる。

序文の鼻祖は周知のように、『詩三百』の毛序である。後の詩集序も文学における政治理念を中心として展開するのだが、それらの詩集の序としての構造は明らかに毛序と異なる構造になる。事実、詩集序の発達は、やはり梁の昭明太子によって編纂された『文選』以降のことである。唐においては、『文選』を真似た撰詩が流行し、現存する唐時代に編纂された詩集で完整のものにはほとんど序文が付けられている。ただ、詩集としての序文の内容構造と形式規範は、少しずつ『文選』と異なっており、特に序文の後半部は、詩人数及び詩数を明記することが類型化しつつある。

『懷風藻』序には『文選』序にない内容が存在している。それは傍線のbとcで示しているところである。『文選』序では巻の総数を明記するが、『懷風藻』序のように、b「総詩数」「総作者数」を明示していない。また序文にも集中にもc「作者官位（爵）」が示されていない。しかし、bとcに示された内容は、後に編纂された勅撰三集序文の重要な手続きとなっている。

では、勅撰三集と唐撰詩集の序とを合わせて考えてみた。  
い。

『凌雲（新）集』序

臣今所集。掩其瑕疵。举其警奇。以表一篇尽善之未易。得道不居上。失時不降下。無言存亡。一依爵次。至若御製令製。名高象外。韵絶環中。豈臣等能所議乎。而殊被詔旨。敢以採擇。水夷讚洋詠井之見。不及大陽昇景化草之明。斯迷博我以文。欲罷不能。辱因編載。卷軸生光。猶川含珠而水清。淵沈玉而岸潤。起至延曆元年。終于弘仁五年。作者二十三人。詩總九十首。合為一卷。名曰凌雲新集。

『文華秀麗集』序

先漏凌雲者。今議而録之。並皆以類題叙。取其易閱。凡作者廿六人。詩一百四十八首。分為三卷。名曰文華秀麗集。鳳掖宸章。龍闈令製。別降綸旨。俯同繚帙。而天尊地卑。君唱臣和。故略作者之數。編採摭之中。臣謬以散材。忝侍詮簡。重承天渙。虔制茲序。臣仲雄上。

『經国集』序

断自慶雲四年。迄于天長四載。作者百七十八人。賦十七首。詩九百十七首。序五十一首。对策三十八首。分為兩帙。編成廿卷。名曰經国集。冀映日月而長懸。

争鬼神而將奧。先入秀麗者。即不刊之書也。彼書漏脱。今用兼収。人以爵分。文以類聚。然年代遠近。人文存亡。搜而未盡。闕而俟後。謹与参議從四位上行式部大輔臣南淵朝臣弘貞。從四位上行大學頭兼文章博士播磨權守臣菅原清公。從四位下行東宮学士臣安野宿禰文繼。正五位下守中務大輔臣安部朝臣吉人等。詳举甄収。無所隱秘。臣等学非飽覽。智異聚沙。朱愚出(之)上。逼以敵命。辞而不獲。敢以参議。爵次姓名列之如左。謹上。天長四年五月十四日。

このように、勅撰三集の序文も『懷風藻』と同様に、b「総詩数」「総作者数」を書き記し、また『凌雲集』と『經国集』にはc「作者官位」を示すところが見える。

先ずbについてであるが、唐以来、詩集序においてはbを明示することが慣例となつていふように思われる。例え

ば、  
○：王昌齡、儲光羲等二十四人、：詩二百三十四首、分為上下卷。(殷璠撰『河岳英靈集』序)

○見在者凡九十人、詩二百二十首、為之小集、成一家之言。(芮挺章撰『国秀集』序)

○凡七人、詩二十四首。時乾元之三年也。(元結撰『篋中集』序)

○述者二十六人、詩總一百三十四首、分為兩卷。(高仲

武撰『中興間氣集』序)

○凡二十一人、共百首。(姚合撰『極玄集』序)

○才子一百五十人、誦得者、名詩三百首。(韋莊撰『又玄集』序)

○今纂諸家歌時、総一千首、每一百首成卷、分之為十目。

(韋穀撰『才調集』叙)

唐人撰の唐詩総集は約百三十余りあったが、傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』には十三本ほどの唐人撰の詩集が載り、ほぼ現存するものが揃うこととなる。初唐の許敬宗撰と思われる『翰林学士集』と崔融撰『珠英集』、盛唐の殷璠撰『丹陽集』、中唐に編纂されたと思われる佚名撰『搜玉小集』の四本は残簡しか残らず、それらの序文は見当たらない。『唐人選唐詩新編』に載る『丹陽集』には簡潔な序があるが、それは『吟窓雜録』によるものであり、元来の姿を完全に映しているかどうかは疑問である。また晩唐の令狐楚撰『御覽詩』もやはり損傷があると思われる、その序文は残っていない。中唐の李康成撰『玉台後集』には序があるが、その序の内容は非常に簡単であり、一般的な詩集序とは異なる<sup>13)</sup>。一方、序が現存しない詩集の後人による跋文をみれば、例えば、

右唐御覽詩一卷、凡三十人、二百八十九首。(陸遊による『御覽詩』の跋文)

按『通志』『通考』、猥云『搜玉』一集、迺唐人選當時

名士詩、俱不載何人部署、共計三十七人、詩六十三首。

(毛晋による『搜玉小集』の跋文)

とあり、やはり詩人数・詩数を書き示すものが見られる。

また、清時代の光緒年間に刊行された『翰林学士集』には貴陽陳氏の序文が付され、

日本尾張国真福寺旧藏唐卷子、『翰林学士集』一卷、

太宗詩九首、長孫無忌詩四首、上官儀詩五首、楊師

道・褚遂良詩各三首、劉子翼詩二首、許敬宗詩二十二

首、序一首、岑文本・劉洎・朱子奢・于志寧・沈叔

安・張文琮・鄭元璠・張後胤・陸摺・高士廉・鄭仁軌

詩各一首、失名一首。

とあるように、詩人と詩数とを明確に示そうとすることが窺える。こうしたことは、詩人数と詩数を明らかに記すことが、詩集序の欠かせない手続きであることを意味する。

それは、詩集を編纂することは時空を超越する世界を作り出すことであり、その限られた撰集のなかには、限られた優れた詩人しか許容することができないという、唐以降の新たな文学理念の現われであると思われる。『懷風藻』の編者は、唐のこの新たな序文スタイルに敏感に反応し、『懷風藻』序にいち早く取り入れたのである。

なお、現存する唐時代に書かれた新たな詩集序スタイル

の最も古くかつ完全なものは、盛唐の撰詩家殷璠によって選ばれた『河岳英靈集』序（叙と論の二部で構成）である。『河岳英靈集』の成立には諸説あるが、『懷風藻』よりやや遅れて、天寶十一年（七五二）或いはそれ以降に成立したという説が有力となっている。従って、『懷風藻』の序文は、『河岳英靈集』より早く成立したこととなり、現存する『文選』以降の新たなスタイルの詩集序の最古の規範となり、その文献学的な価値は極めて高いと思われる。

### 三 『懷風藻』詩序の「並頭爵里」の意味するもの

『懷風藻』序にはc「具に姓名を題し、并せて爵里を顯はし、篇首に冠らしむ」とあり、「爵里」の意味は日本古典文学大系本の頭注に「官爵と郷里」とみえるが、實際、集中六十四人の作者をおおよそ時代順に並べ、その氏名及び官位を示しているが、郷里―出生地を書き示すことはなかった。また、集中には僧侶の作品も所収するが、釈弁正伝に「帝嘉みしたまひ、僧正に拜したまふ」、釈道慈伝に「帝嘉みしたまひ、僧綱律師に拜したまふ」とあるように、律令体制下の僧侶の政治的地位を示すのみに止まり、出生地に関してはやはり序文が示す通りには記されることはなかったのである。

『文選』はその序文に「遠自周室、迄于聖代」と示され

ているように、周（主に戦国時代）から、編者の昭明太子の梁時代までの作品を集めている。しかし、『文選』の目錄には、

#### 第一卷

##### 賦甲

##### 京都上

##### 班孟堅兩都賦二首

とあり、その本文も、

##### 班孟堅兩都賦二首

##### 兩都賦序

##### 班孟堅

となっており、作者の政治的地位を書き記していない。後に李善が『文選』を注釈する時、作者「班孟堅」について「範曄『後漢書』曰班固、字孟堅。北地人也。年九歲能屬文、長遂博貫載籍。顯宗時、除蘭台令史遷為郎、乃上兩都賦。大將軍竇憲出征匈奴、以固為中護軍、憲敗、固坐免官、遂死獄中」と注し、作者の経歴や政治的地位を書き記すのを見る。波戸岡旭氏は『懷風藻』の詩と詩人伝とを組み合わせるという編纂方法は、中国のものには未だ例証がなく、『懷風藻』編者による独自性が強いと指摘する。しかし、『文選』李善注と『懷風藻』の詩人伝には類似の部分が多いことは否めず、『懷風藻』編者がそれを参考にし、

編纂方法に取り組んだ可能性が全くないとは言いつれないのである。そして、李善は初唐期に活躍した学者であるから、彼による注釈方法は、直接的に初唐期の文学観を反映していることは重要であると思われる。

また、詩人の政治的地位を書き記すことも、『懷風藻』の独自の編纂方法ではないことは、同様な編纂方法で唐に編纂された詩集の中から、以下のような例を挙げて検証することができる。

『翰林学士集』

五言塞外同賦山夜臨秋以臨為韻。太宗文皇帝

五言遼東侍宴山夜臨秋同賦臨韻。黃門侍郎弘文館

学士臣 遂良上

五言遼東侍宴山夜臨秋同賦臨韻。秘書郎弘文館直

学士臣上官儀上

五言遼東侍宴山夜臨秋同賦臨韻。太子右庶子高陽

學開國男弘文館學士臣許敬宗上

『珠英集』

通事舍人吳興沈佺期十首

蒲州安 県令宋国喬備四首

太子文学河南元希声二首

『丹陽集』

句容三人

忠王府倉曹參軍殷邁

硤石主簿樊光

横陽主簿沈如筠

江寧二人

右拾遺孫処玄

処士余延寿

唐に編纂された現存する詩集では以上の三本のみが詩人の政治的地位を書き記している。官爵以外に郷里を明示しているものは『珠英集』と『丹陽集』がある。『翰林学士集』と『珠英集』は初唐、『丹陽集』は盛唐の編纂であり、そこには初・盛唐における文学理念の一端が説明されている。では、このように詩集に詩人の政治家的な地位を明示することに一体どのような必要性や目的があったのであろうか。

最初に作者の「爵里」が登場したのは、唐の太宗時代である。『旧唐書』には以下のような記事がみえる。

始太宗既平寇乱、留意儒学、乃於宮城西起文学館、以待四方文士。於是、以属大行台司勳郎中杜如晦、記室考功郎中房玄龄及于志寧、軍諮祭酒蘇世長、天策府記室薛收、文学褚亮・姚思廉、太学博士陸德明・孔穎達、主簿李玄道、天策倉曹李守素、記室參軍虞世南、參軍事蔡允恭・顔相時、著作佐郎撰記室許敬宗・薛元敬、

太学助教蓋文達、軍詔典籤蘇昂、並以本官兼文学館学  
士。及薛收卒、復徵東虞州録事參軍劉孝孫入館。尋遣  
函其状貌、題其名字・爵里、乃命亮為之像贊、号十八  
学士寫真圖、藏之書府、以彰礼賢之重也。諸学士並給  
珍膳、分為三番、更直宿于閣下、每軍国務静、參謁帰  
休、即便引見、討論墳籍、商略前載。預入館者、時所  
傾慕、謂之「登瀛洲」。

武徳四年（六二一）十月、当時秦王であつた唐太宗の李世  
民は天下を統一し、ようやく太平の世を迎えようとする  
ときに、宮城の西側に文学館を建てた。そこで、天下から  
十八人の一流の文士を賢臣としてこの文学館に迎え入れ、  
姓名と官爵・郷里を題し、肖像画まで作らせて掲げたとい  
う。そして、太宗はこの賢臣たちの中で、政治や文学、歴  
史などについて討論させた。当時、この文学館に入館でき  
ることは大変な誇りであり、時の知識人に「登瀛洲」と言  
われるほどの、羨望の的であつた。太宗はこの文学館の建  
立の意義について「引礼度而成典則、暢文詞而詠風雅」と  
述べ、文学的な「文詞・風雅」と政治的な「礼度・典則」  
とを合わせて考えることを試みたのである。文学館の建立  
は太宗の秦王時代であつたが、玄武門事変後、太宗は正式  
に皇位を継ぎ、その二ヶ月後、即ち貞観元年（六二七）の  
九月、今度は勅令で弘文館を造り、そこに二十万巻余りの

書物を収集する。その弘文館は、

精選天下賢良文学之士虞世南・褚亮・姚思廉・蔡允  
恭・蕭德言等、以本官兼学士、令更宿直。聽朝之隙、  
引入内殿、講論文義、商量政事、或至夜分而罢。

と、天下賢良の士を精選して官職と学問を兼ねる人物を任  
命し、文章道と政道を講義し量ると言う場所であつた。こ  
の情景は『懐風藻』の序に「旋招文学之士、時開置體之  
遊」とあるような淡海（近江）宮廷の「置體の遊び」と重  
なる。ここに登場できる人物は「本官兼学士」といったよ  
うに、優れた政治家であり、また優れた学者でなければな  
らないのである。太宗李世民のこの「文章経国」思想は唐  
時代における文学の復興と繁栄に大きな影響力を与えたの  
である。後に、初唐四傑の盧照鄰は「南陽公集序」におい  
て、

貞観年中、太宗：留思政塗、内興文事。虞（世南）・李  
（百薬）・岑（文本）・許（敬宗）之儔以文章進、王  
（珪）・魏（征）・来（濟）・褚（遂良）之輩以材術顕、咸  
能起自布衣、蔚為将相、雍容侍従、朝夕猷納。

と述べ、太宗李世民の「文章経国」の偉大なる功績を唱え  
た。ここで注目したいのは、当時の君臣（または朝野）に  
おける「政」と「文」に対する共通認識である。「文」を  
以て「政」を治めることは、儒教の教えを中心とする中国



文学の伝統であり、特徴でもある。この「文章経国」理念が完成したのが唐の時代であり、太宗李世民の君臨した初唐の「貞観の治」は、以来凡そ三百年も続く大唐という時代の大きな風潮を開いたのである。<sup>(2)</sup>そこには太宗李世民の理想とした国家像があり、それは「明君」と「賢臣」によって作られた太平の世である。そして、その賢良の臣子となるためには優れた文学の才能を持つことが要求された。

太宗李世民は「賢明」の君として、以来歴代の帝王に崇められ、その芸文方針が継承されることとなる。初・盛唐では、多くの詩文集が編纂されるが、その詩文集に載る素晴らしい詞章は、「明君」と「賢臣」による太平世界の和唱であるべきだと考えられた。その典型となるものが、文学館に選ばれた十八文士中の一人である許敬宗が編纂した『翰林学士集』である。『翰林学士集』の命名については、陳氏刊本（清朝光緒）の序文に疑問が出されており、『貞観中君臣唱和詩集』とする説があつて、この方がむしろ適切だと思われる。

ところで、「爵」と「里」の両方を書き記している詩集には『珠英集』と『丹陽集』がある。『珠英集』はまた『珠英学士集』と称し、『新唐書』『芸文志』に「珠英学士集五卷、崔融集武后時修三教珠英学士李嶠、張說等詩」とみえる。これによると、『珠英学士集』は元来五巻あり、

則天武后の時に勅旨を承つて『三教珠英』を編纂した李嶠、張說などの詩を集めたものである。『珠英集』は宋以降散佚とし、今世紀の初めに敦煌に巻四・五の残簡が発見され、現在パリとロンドンの博物館に収蔵されている。また、『日本国見在書目録』四十「総集家」には「珠英学士集五」とみえ、平安時代にすでに日本に伝来していたことがわかる。現存する『珠英集』の残簡には序文がないが、宋の晁公武の『郡齋讀書志』巻二十に、

『珠英学士集』五卷。右唐武后朝詔武三思等修『三教珠英』一千三百卷、予修書者四十七人、崔融編集其所賦詩、各題爵里、以官班為次、融為之序。

とあり、晁公武の生きていた時代までは『珠英集』は完全であり、崔融による序文もあったことがわかる。現存する『珠英集』の残簡もほぼ官位の階級によつて配列され、前文に挙げた例の通り、作者の「郷里」も記されている。従つて、或いは『郡齋讀書志』がいう「各題爵里、以官班為次」は崔融による『珠英集』序にあつた内容と考えられる。『旧唐書』『列伝・崔融』によると、崔融は崔州全節の出身で、科挙に合格し、後に宮門丞に任じられ、崇文館の学士も兼ねていた。この崇文館は貞観十三年に建立された崇賢館であり、後に太子李賢の名を避忌するために改めたのである。「崇賢」が「崇文」に改められても、「賢臣」たる

者は文章道に精通しなければならぬことが求められているのである。

初唐に編纂された『翰林学士集』と『珠英集』は、その作者も編者も「官僚」と「学士」という二重の身分を持つ者であることが知られる。ここに「賢臣」としての必要な条件を彼らは具備しているのであり、それは彼らにとつての自負でもある。そして、「薄官」と謙遜する『懷風藻』編者の某官も、同様に「文囿」に悠遊する官僚学士である。学士としての政治家、政治家としての学士は彼らにとつては切っても切り離せない律令国家としての「賢臣」の象徴であろう。そのためもあつて、その詩集に詩人の政治的な地位を明示することの必要性和目的はここに自ずから明かとなる。そして、平安の勅撰三集が編纂される際には、この方法が取り入れられ、律令国家としての文学のあり方をいつそう明確に認識することで、「文章経国」の詩学理念を鮮明に打ち出したのである。

『丹陽集』は『懷風藻』と前後して、盛唐の詩撰家の殷璠によつて編纂されたものであり、ここでは多くを触れないが、その編纂方法は初唐の『翰林学士集』や『珠英集』の編纂方法を継承したことは明らかである。また、詩集に作者の「郷里」を記すことは、歴史書物の伝記などに用いる方法と同様のもので、『懷風藻』にも合わせて九篇の伝

記があり、これが詩（志）の始原的な姿を復元しようという試みであろうか。なお、『懷風藻』序が「並頭爵里」としながらも、集中において作者の「郷里」を書き示さなかつた原因については、次のことが考えられる。中国においては全国規模の推挙制や科挙制度が官僚登用の背景にあり、その出生地が重んじられた。そこには、儒教の教えが深く浸透した官僚集団・秀才集団による「郷党」意識の働きも窺えるのである。これに対し、『懷風藻』における詩人たちは都を中心とした狭い地域の出身者が殆どであるから、むしろ氏姓によつて示されるように、身分・氏族が優先された結果であつたと思われる。

#### 四 おわりに

初唐、太宗李世民が唱導した政治理念は「文」にあつた。李世民は「政教之道、其在書内」（『貞観政要・悔過』）と考え、「貞観以来、手不釈卷、知風化之本、見政理之源」（『貞観政要・慎終』）と「文」に強くその政治の理念を求めていた。李世民のこの文治姿勢は、唐の文華を咲かせるが、その先駆にあつたのは『翰林学士集』であつた。そして、その太平の世による「文治政策」は詩集とともに、遣唐使船によつて日本に舶来された。

『懷風藻』に載る多くの詩作は公宴詩であり、君臣和楽

を目的に作られた皇徳を称揚するものである。<sup>25</sup> その性格は『翰林学士集』などと相似することは言うまでもない。また、私宴における同士交遊の詩作もまた「風流化された君臣和楽」の所産である。<sup>26</sup> 『懷風藻』の編纂者が、その詩宴を再現しようとする目的は、「詩宴を支える〈文〉と〈学〉とを再び獲得しようとする行為」<sup>27</sup>であり、更には、初唐の「文治政策」と等しく「文」と「政」とを連合することに よって、儒学の詩学理念の古代日本への導入を提起したのである。

このようにして、『懷風藻』が成立する状況が整えられたのであるが、その文章理念は序文によって示された。中国六朝『文選』序を承けながらも、一方に唐代の詩序のスタイルをも取り込んで、新たな序文の成立を見たのが『懷風藻』の序であった。『文選』のみではなく、唐の新しい文章理念の中で日本最初の詩集の編纂が進められていたのであり、それは懷風藻詩の全体に及ぶ問題として十分に考慮されるべきものであると思われる。

## 注

- (1) 江戸時代の詩人、儒学者の江村北海は、『日本詩史』巻四・徂徠の條において「我邦與漢土、相距万里、劃以大海。是以氣運每衰于彼、而後盛于此者、亦勢所不免。

其後于彼、大抵二百年、胡知其然。懷風・凌雲二集所収五言四韻、世以為律詩、非也。其詩對偶雖備、声律未諧、是古詩漸變為近体、齊、梁、陳、隋漸多其作。我邦承其氣運者、稽其年代、文武天皇大宝元年為唐中宗嗣聖十四年、上距梁武帝天監元年、凡二百年。弘仁天長、髣髴初唐、天歷應和、崇尚元白……とのべている。日本漢詩の歩みが中国より二百年も遅れて、懷風藻時代の詩文は、齊、梁、陳、隋の詩風に接し、弘仁・天長期の詩文は中国の初唐に相当するという認識である。この論考は、実に長く日本漢詩、漢文学研究活動に影響を与えてきた。

## (2)

吉田幸一氏「懷風藻と文選」(『国語と国文学』第九卷十二号。昭和七年十二月) や小島憲之氏「上代日本文学と中国文学・下巻」(塙書房。昭和三十七年)、または波戸岡旭氏「上代漢詩文と中国文学」(笠間書院。平成元年十一月)などを参照。近頃、呉哲男氏は「文選」の空間的な分類を前提にしてそれを時間軸に置き換えることで、『懷風藻』の時代順のアンソロジイが可能となったのだ」と指摘し(『懷風藻にみる〈風景〉の成立——東アジアの中の古代文字』辰巳正明編『懷風藻——漢字文化圏の中の日本古代漢詩』笠間書院・平成十二年十一月)、『懷風藻』編者が『文選』から受けた影響関係を再確認した。なお、『文選』以外からの影響関係を明らかにした論説には、例えば蔵中進氏「懷風藻序私案」(『私論』第十二卷。一九六六年)の玄奘法師「大唐西域記」からの影響論などがある。

(3) 加藤有子氏「懷風藻」序と中国文学の序」(『懷風藻研究』第五号。日中比較文学研究会編。一九九九年十一月)。

(4) 本文は岩波日本古典文学大系本『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』(岩波書店。昭和三十九年版)による。以下同。

(5) 本文は中華書局一九八七年版『六臣注文選』による。以下同。

(6) 注2に同じ。また、日本古典文学大系本の補注を参考。

(7) 松浦友久氏は「当時の中国や日本における詩歌の集の書名は：編者の願望や予祝を表示するものは存在しない」(『万葉集』という名の双関語(再論)―日中比較詩学の懸案に即して―)『国文学研究』第一二六集。平成十年十月)と指摘するが、詩集を編纂すると言う行為には、詩学理念(毛序)を伝世しよう、という編者の願望が存在するはずである。また、詩集を命名することが序文スタイルの大切な手続きとして重要視されたことは、命名による文学理念の伝達が可能であるゆえである。

(8) 唐人撰詩集の本文は傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』(陝西人民出版社。一九九六年七月)による。以下同。なお、『河岳英靈集』の成立時期は天宝四年(七四五)、天宝十一年(七五二)、天宝十二年(七五三)と諸説があつて、いずれも『懷風藻』の成立時期(七五一)と接近し、その間に影響関係があるとは考えられないが、ここでは、初・盛唐の詩集における命名の傾向として挙

げるのみである。

(9) 波戸岡旭氏「懷風藻と中国詩学―『懷風藻』序文の意味するところ」(辰巳正明編『懷風藻―漢字文化圏の中の日本古代漢詩』笠間書院。平成十二年十一月)を引用。同氏は『上代漢詩文と中国文学』(笠間書院。平成元年十一月)の「序文考―『文選』序文との比較―」において、「懷風藻」序は「文運衰退に対する危機意識が背後にあった」と述べる。

(10) 辰巳正明氏「懷風藻の詩学(二)―置體の遊び―」(日中比較文学研究会編『懷風藻研究』第五号。一九九九年十一月)を参照。

(11) 『凌雲集』序と『経国集』序の本文は小島憲之氏『国風暗黒時代の文学』(塙書房。全八冊。昭和四十三年十二月)平成十年十月)による。『文華秀麗集』序の本文は岩波日本古典文学大系『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』(岩波書店。昭和三十九年六月)による。

(12) 注8を参照。

(13) 詳しくは傅璇琮編撰の上掲書の各集の「前記」を参照。

(14) 傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』(陝西人民出版社。一九九六年七月)、『河岳英靈集』の「解説」部分を参照。

(15) 『懷風藻』僧伝については、山口敦史氏「東アジアの漢詩と僧侶―『懷風藻』僧伝研究序説―」(辰巳正明編『懷風藻―漢字文化圏の中の日本古代漢詩』笠間書院。平成十二年十一月)に詳しい。

(16) 波戸岡旭氏前掲書。

(17) 本文は文淵閣版『四庫全書』（『旧唐書』）「列伝第二十（二）」による。

(18) 『全唐文』「置文館學士教」を参照。

(19) 『唐会要』卷六四から引用。

(20) 辰巳正明氏「近江朝文学史の課題」『万葉集と中国文学 第二』（笠間書院。一九九三年五月）を参照。

(21) 『盧照鄰集』卷六から引用。

(22) 『唐会要』卷三十六は貞観初期の文学の隆盛について「其書、算等各置博士、凡三千二百六十員：於是国学之内、八千余人、国学之盛、近古未有」と記述する。

(23) 傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』（陝西人民教育出版社。一九九六年七月）に載る『翰林學士集』の「解説」によると、『翰林學士集』の残簡は日本の真福寺に現存し、もともとの書名は散佚した。現在の書名は後の人に命名されたものと思われるが、陳氏刊本の序は「考翰林學士、開元時始置、集皆初唐人詩、無緣得加此名。集有御詩、而題「翰林學士」、亦殊不典」とその命名を否定した。また、日本の学者の服部宇之吉はそれを『貞観中君臣唱和詩集』と集名を改めたという。

(24) 中西進氏「薄官文囿に遊ぶ」『万葉史の研究』中巻（桜風社。昭和四十三年七月）を参照。

(25) 辰巳正明氏前掲書（注20）参照。

(26) 井実充史氏「君臣和楽と同士交遊と―『懷風藻』宴集詩考」（辰巳正明編『懷風藻―漢詩文化圏の中の日本古代漢詩』笠間書院。平成十二年十一月）を参照。

(27) 小林渚氏「『懷風藻』序文の再検討」（『人文科学』第三号。大東文化大学人文科学研究所。一九九八年三月）を引用。